



悠久の 時を感じて



香具波志神社

① 香具波志神社の歴史は古く、境内には様々な史跡が残されている。
② 三好長慶が戦勝祈願の際に奉納したとされる鳥居の沓石。③ 上田秋成寓居跡。上田秋成は4年間この神社に身を寄せていた。



歴史と伝統行事を今に伝える

住宅や工場が立ち並ぶ町中に、突如現れる大きな鳥居。鳥居の朱色と木々の緑の対比が鮮やかなここは香具波志神社。

加島地域は中国街道の渡し場、神崎川・猪名川水系の港があり、交通の要所として栄えてきた。このため香具波志神社には遠方からの参拝者も多く訪れたという。「香具波志」という名前は、飛鳥時代に孝徳天皇が有馬温泉へ向かう途中、当地付近を通り、「かこはしやこのはなもみせくかもこのはな」と詠んだ歌に由来している。境内には南北朝時代に楠木正儀が戦勝祈願に来社の際、愛馬をつないだ旧天然記念物の

「駒つなぎの楠」の切り株が残されている。また、資料館「香文館」には戦国時代に三好長慶が奉納した大鳥居の沓石や社名額、『雨月物語』の作者である国学者、上田秋成の遺構や江戸時代の銭貨である寛永通宝を鋳造していた加島銭座の資料なども多数保管されているという。これらは春の稻荷大祭にて公開され、この神社が歴史上の著名人と深くゆかりがあることがうかがえる。

現在は夏祭り、秋祭りの際に神輿太鼓の巡行や子ども会の獅子舞傘踊りが奉納されるなど、伝統行事を地域へ伝える役割も担っている。



▲掃き清められた参道の脇には、多数の灯籠が立ち並ぶ。



▲楠木正儀が愛馬をつないだ樹齢800年を超える大楠の切り株。